
陽炎の向こう側 （続・同窓会で逢おうね）

桜坂 恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽炎の向こう側 （続・同窓会で逢おうね）

【Nコード】

N3246B

【作者名】

桜坂 恵

【あらすじ】

二十年振りの同窓会で再会し、恋に落ちた准哉と祥子。道ならぬ恋に悩んだ祥子が心身に不調をきたし、そのため一度別れる。別れて二年後・・・お互いに変わらぬ心のままの同窓会。二人はまたも愛し合ってしまったが・・・。

1・（前書き）

連載しておりました「同窓会で逢おうね」の続編です。
まだ前作をお読みでない方は、出来れば、前作からお読み下さい。

六月十三日・火曜

眩しい日差しを避けるように、ずっとホテルでのデートばかりを繰り返していた。

ライティングを一度全て落としてから、ベッドサイドのスポットだけをオンにした。

二年半振りの再会の後、二人は以前より頻繁に逢瀬を重ねるようになっていた。

祥子の躰はこの二年半で、少し丸みを帯びたように感じたが、決して本人の言うような、太ったという程の感じではなかった。

依然と同じように、白く、しなやかで、愛おしかった。

オレンジのブラウスの胸元には、三年も前にプレゼントしたネックレスが、揺れていた。

いつものように、並んでソファに座った。左手で頭をそっと引き寄せると、祥子が左肩に

もたれ掛かってきた。右手で胸元のブレスレットにふれると、祥子が少し顔を上げた。

長いキスが始まった。

祥子は今日もシャワーを浴びようとはしなかった。

家を出る直前にシャワーを浴びてきているのは、知っていた。だからそのことで、俺がとやかく言うことはなかったが、外でシャワーを浴びないことで、祥子が自分の良心に対して、なにか言い訳をしているように思えた。

祥子のその気持ちは、俺にもよくわかった。それでも、会ったたびに俺は祥子を抱いたし、祥子もまた、それに応えた。

キスをしながら、ブラウスのボタンを二つ外すと、黒に花柄の刺繍の入ったブラジャーが、祥子の白い胸を覆っているのが見えた。

ブラの隙間から右手を差し込んで、乳房にふれた。

指先で、乳首を挟むようにして、乳房を包んだ。祥子の息が弾んだ。キスをしている祥子の口が、少し大きく開いた。この時の祥子の暖かい息は、「雌」を思わせて、刺激的だった。

胸元から一度手を抜き、ブラウスを脱がせる。すぐに背中に回す。ブラのホックを外して、肩紐から左肩を抜き、次に右肩を抜く。

祥子が俺の首に両手を回し、キスをせがむ仕草をする。軽く唇を合わせた後、あらわになった乳首に口を付ける。乳首を口に含むと、祥子が少し軋をよじって、「ああっ」と声を出した。少し強く吸う。祥子は胸への愛撫を好んだが、やさしい愛撫より、少し強いものの方が、感じる様だった。

乳首を含んだまま、右手でスカートのサイドファスナーを降ろす。そこまですると、後は祥子が自分でスカートを床に落とした。

「ベッドへ行こう。」

そう言って、俺が立ち上がると、祥子が俺のベルトに手を伸ばし、手早く外した。

スラックスを落とすと、トランクス越しにキスをする。

祥子のキスを下半身に受けながら、シャツを脱いだ。

祥子を立たせて、ベッドに誘った。祥子がベッドに横たわった。ブラと同柄のパンティーが茂みをおおっている。

その上に、そつと右手を置くと、祥子が「あああつ」と声をあげた。

中指で狭間をゆっくりとさする。

一番敏感な部分に指先が触れるたびに、祥子は声をあげた。その部分だけを集中的に、そつとこするようにすると、「あ、あつ」と祥子は間断なく声を出した。

下着のその部分が濡れているのが、指先に伝わってきた。そのタイミングで、下着を脱がせた。

祥子の狭間は、もう充分すぎるほど濡れていた。そつと手のひらで、茂みを被うと、手のひらの真ん中が濡れた。中指をそつと浅く狭間に沈めると、一瞬祥子の声が高くなった。

中指で祥子の潤みを掬って口に含んだ。祥子の味だ。

祥子は「イヤ」と言いながら、俺の中指を口から外そうとした。俺が「祥子のは美味しいよ」と言うと、祥子は「バカッ」と言い、首を横に向けたが、俺の手がもう一度祥子の狭間に沈むのを感じると、ひととき大きく「あああつ」と歓喜の声をあげた。

そして、「ねえ、もうだめ。早く来て。」そう言いながら俺の部分を右手で握り、しごくように動かしながら、一緒になることをせがんだ。

俺は仰向けに横たっている祥子の腰に両手を添え、裏返すようにし向けた。

俺の意図を察して祥子が俯せに体位を変えた。祥子は、白く、丸みのある臀部を、自分から持ち上げるようにして、俺を待ち受けていた。

俺は、後ろから臍を繋いだ。ゆっくりと入っていくと祥子の口から愉悦の音が漏れた。

「うつつ、いい。あああ、ああ。」

ゆっくり出し入れをするたびに、祥子は声にならない声をあげた。
「うっん、あああ、だめゝあたるゝあああ。」

祥子の声の調子に合わせるように、深く沈めたまま左右に揺する。

祥子が「あああゝいく。」と声をあげ、ベッドに沈んだ。

俺は危ういところで、身体を繋いだまま、祥子の臍に覆い被さり、後ろからうなじの辺りに軽いキスをした。

やがて祥子の高ぶりが静まっていった。そつと祥子から臍を離し、沿うように横になった。

祥子は強く目を閉じ、臍の奥に残った快感の余韻を味わっていた。

「私だけね、ごめん。」そう言っつて祥子は俺を見た。

「まだ、これから。」俺はそう言っつて祥子の額にキスをした。

祥子が今日二度目に「バカ」と言っつて俺をにらんだ。

こついつ時の「バカ」は「大好き」と同義語だった。

祥子が冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して、一口飲んだ。それからいつものように、口移しに俺に飲ませる。

そのキスを合図に、俺はもう一度、祥子の臍を引き寄せた。

2 .

2

六月二十二日・木曜

俺の左側の駐車スペースに、見慣れたBMWが、少し危なげなバツクで入ってきた。

「待った？」祥子が運転席のウィンドウを降ろしながら聞いた。

「いや、俺もたった今、着いたばかりだから。」助手席のウィンドウ越しにそう答えた。

祥子が自分のBMWからバツグと日傘を持って、俺の助手席に移ってくる。

軽いキスを交わす。

郊外のこのスーパーの駐車場で待ち合わせることが多い。

大抵の場合、祥子のBMWはここでほぼ一日、主が戻るのを待つことになるのだった。

「何時まで？」会つと祥子に許された時間を聞くのも、いつもの習慣だった。

「5時。5時半ならぎりぎりOKかな。」

祥子はそう言って、バツグから取り出したキャビンマイルドを俺に差し出した。

祥子はタバコを吸う。マイルドセブン。デートの前や、途中でコンビニに立ち寄った時

などに、自分のタバコと一緒に俺の分を買う事が多い。

祥子のこんなちょっとした気配りが俺には嬉しかった。

「ありがとう。」俺がそういうと、祥子は「准哉は、ありがとうって、さらっと言えるのね。」と変なところで感心する。

祥子に言わせると、旦那の一番の欠点は ありがとう。 と言えない事らしい。

「俺だって、嫁さんにはいつも言う訳じゃない。」と言って俺は笑ったが、ほんとのところは、女房にだって、何かしてくれたら（ありがとう）くらいは言う。

「いつもじゃないって事は、時々言うんでしょ？それってスゴイよ。」と祥子は言った。

世間一般の夫婦間は、大抵そんなものだろう。言わなくてもわかると思っっているうちに、

ホントは何も伝わらなくなっている。そんなところだろう。

俺の場合も「ありがとう」以外は ご他聞に漏れず だ。

「どこか行きたいところはあるか？」そう聞くと、祥子は「とりあえず美味しい珈琲。」と言った。

時折立ち寄る珈琲専門店に向かった。

席に着き、祥子はホットを、俺はアイスコーヒーをそれぞれ頼んだ。

祥子はホットでもアイスでもコーヒーはブラックで飲む。太ることを気にしているのか。

俺はどちらにも砂糖を入れる。若い頃は、格好をつけて、無理してブラックも飲んだが、

まずいので止した。こればかりは嗜好の問題だから仕方がない。

「ねえ、アキヒコから何か聞いてる？」祥子がそう切り出した。
「ん？何？」俺はこしばらく藤川とは連絡を取っていなかった。
「カヨがね、昨日の夜、うちの家に来たの。」

藤川とカヨと一緒に暮らすようになって、かれこれ二年になる。
正式に結婚するのだとばかり思っていたが、二人は、入籍せずに、
いわゆる内縁のまま一緒に暮らしていた。

何故入籍しないのかと藤川に直接聞いたことはない。もっとも、
そんなことは常人同士で
決めることだから、俺が口を挟むことではなかった。

「カヨちゃん、どうかしたの？なんかあったのか？」
そう聞くと、祥子が、うんと頷いた。

「アキヒコと別れるって。」そう言った祥子の目が少し潤んでいた。
「えっ、ほんとに？藤川からは何も聞いてないぞ。どうして？」
祥子の言葉は俺にも意外だった。藤川とカヨはうまくいってると
ばかり思っていた。

二ヶ月ばかり前には四人で食事したが、そんな様子は全くなかつ
た。

「相変わらず仲がいいな。」と冷やかした位だった。

「アキヒコがいけないのよ。」祥子が言った。

「なにが？わからんな、ちゃんと話せよ。」

俺は少しイライラして聞いた。藤川がどうしたというのだ？

「アキヒコね、最近になって前の奥さんと、よく会ってるらしいの。」

祥子がマイルドセブンを取り出しながら言った。

「それがどうした？なんか用でも有るんじゃないのか？
子供のことか、いろいろあるだろ？」

俺がそう言つと祥子が少し眉をひそめて言つた。

「それが・・・一昨日の夜、帰つてこなかったんだつて。

前の奥さんと一緒だったみたいだつて。」

「ええつ、そりや何かの間違いじゃないのか？あいつは離婚してからもう五年も経つんだぞ？今更なんか有るわけないよ。仕事仲間と飲んでて、帰れなかったんじゃないのか？」

俺は深く考えずにそう言つた。

「カヨがね、連絡もなしに遅いから心配してアキヒコに電話したんだつて。そうしたら、電話に、知らない女が出たんだつて。」

「それで？」

「カヨもビックリして、どなたですかつて聞いたらね、妻ですつて答えたんだつて。」

祥子が段々怒つたように少し早口になつて続けた。

「それでね、カヨが、妻は私です。あなたどなたなの？つて聞いたら、相手はなんて言つたと思う？」

「さあ」俺は答えようがなかった。

「あなた達、まだ正式に夫婦じゃないんでしょ？主人は帰つてきたいつて言つてますから。今、子供と出かけてます。もうそちらには戻りませんから、つて言つたんだつて。」

「カヨはビックリしたらしいけど、ともかくアキヒコと連絡とれないじゃない、それで電話切つた後、じつと我慢してアキヒコから

の連絡を待ったんだけど、結局その日は電話も無かったんだって。昨日の夜、やっとアキヒコが帰って来たんだけど、アキヒコは、こめんってだけで、何にも話さないんだって、何にも。」

「可哀想に、カヨ、泣いてた。」

そう言うとき祥子はハンカチで目頭を押さえた。

予期しない話を唐突に聞かされて、俺も困惑していた。

「祥子がここで泣いていてもしかたないだろ。ともかく、理由も何もわからないからな。俺が藤川に訳を聞くから。」

俺はそう言うときその場から藤川に電話を入れた。

俺の電話に藤川はすぐに出た。

「おう、久しぶり。」藤川の声は心なしか沈んでいた。

「うん。今、電話いいか？」

俺が言うと藤川は、ああ、と答えた。

「今、祥子から聞いた。カヨちゃん、泣かせたらしいな。どうした？」

俺はそう手短かに聞いた。

「うん、お前から電話入るだろうと思ってたよ。」

そう言うとき電話の向こうで、藤川が力無く笑った。

「なんか訳ありだな？今夜、時間取れるか？会って話そう。」俺がそう言うとき

「ああ、わかった。遅くなるけど、帰りに連絡入れるよ。じゃあその時に。」

藤川はそう言うとき電話を切った。

藤川からの連絡が入ったのは十時を過ぎてからだった。何度か行ったことのあるファミレスには藤川の方が先に着いていた。

「忙しそうだな。」俺はそう言っつて藤川の向かいの席に腰を下ろした。

「うん、いや、そうでもないんだが。」藤川はやはり少し疲れているように見えた。

ドリンクバーからアイスコーヒーを席に運んだ後で、俺が切り出した。

「どうした？さっちゃんと会って、なんか有ったのか？」

俺は、そう聞いてから、藤川の前妻の名を口にするのは、おそらく五年振り位だろうか、などと考えていた。

「・・・ちよつとな。」

藤川はどこから話せばいいのかを考えていたのだろう。ようやくという感じで、ぼつりぼつりと話し始めた。

藤川が幸子と離婚してから、およそ五年になる。その間、子供のことなどで何度か会う機会があったものの、カヨと暮らすようになってから、幸子とは一度も会ってはいなかったらしい。それが、一ヶ月ほど前に、突然幸子から「聞いて欲しい話があるから」と連絡があつて、会うことになった。

藤川との離婚後、幸子はそのまま子供と一緒に、今は幸子名義になつているマンションで生活していた。付き合っている男はいたらしい。というより、離婚前からの関係がまだ続いていたのだ。だが別れた藤川にとって、それはどうでもいいことだった。

会ってみると、幸子の様子がおかしかった。

その時、幸子は、男とは一年程前に別れたと言ったらしい。子供がどうしても懐かなかったのだと。子供はあなたと暮らしたがっている。だからもう一度やり直したい。幸子はそう言った。そう話す幸子の様子が以前とは全く別人のようで、たぶん少し心のバランスを崩していると思ったと、藤川は言った。

案の定、幸子は話の中で、

「自分一人では子供を育てては行けない。あなたが戻ってくれないなら、生きてはいけない。」とおよそ勝ち気な幸子に似つかわしくない言葉を吐いた。

藤川は困惑した。その日は、とにかく幸子が落ち着きを取り戻すまで話を聞き、マンションに送り届けた。幸子はその翌日から、昼間、藤川の仕事中に電話を寄越すようになった。

帰りに寄って欲しいとか、夕食だけ一緒に食べて欲しいとか。

藤川は先日の幸子の様子が普通で無かったこともあって、幸子の言うように子供と三人で夕食を取った。そんなことが、週に1、2度あったらしい。もちろん、カヨには内緒だった。藤川は、悩んでいたらしい。

一番心配だったのは子供のことだったと藤川が言った。

一昨日の夜も、夕食をと誘われるままにマンションに向かった。だがその日、子供はいなかった。聞くと、幸子の実家にいると言う。藤川が夕食後帰ると言うと、幸子が許さなかった。

今夜は泊まってと。それは出来ないと言うと、
「あなたが帰ったら、私は死ぬ。」と言う。

藤川が携帯に触れることも許さなかったらしい。

「どうしても帰ることが出来なかった。」藤川はそう言った。

「どうしていいか解らない。幸子の実家に、幸子の様子が変だからと連絡をしたが、あなた方の問題だから、あなたにも十二分の責任があるのだからと、取り合わなかった。初めは、病院に行かせた方がいいのかとも考えた。だけど俺との間の話以外に、おかしい点は無いのだから、病気なんかじゃないんだと思う。」藤川はそう言って、うなだれた。

幸子は勝ち気な上に、もともと少し神経質なところのある女だった。

俺は昔、藤川と幸子が結婚する時の結婚式の事を思い出した。

俺が司会をする事になっていた関係で、式の進行などで、打ち合わせに駆り出されることがあった。その時、幸子が細かなことにこだわって、譲らなかったことに、少しうんざりしたことがあった。

自分でこうと思いきんだら譲らない、そんな一面が幸子にはあった。

「うーん、大変だな。」

藤川の長く込み入った話を聞き終えて、とりあえず俺が言えたのはそれだけだった。

「それにしても、どうして俺に言わなかった？カヨちゃんにもちゃんとやっていれば、泣かせなくて済んだらう？」俺はやつとの事でそうつないだ。

「ああ、そうかもな。でもな、余計な心配かけるし。お前はともかくカヨには言えなかった。可哀想だろ。」

藤川はそう言うと、吸い殻のあふれそうな灰皿でタバコをもみ消した。

「可哀想って言うのは違うだろ？後で知らされ方がよっぽど可哀想だろ？」

俺はそう言ってしまったから、そんなことは藤川にだってわかっているだろうな　と思った。

「うん。いや、カヨに言えないのは・・・。」

藤川はそこで一度言葉を切った。

「幸子のところに行くようになって、子供と三人で食事なんかしていると、このままここに居てやろうかと思うことがあったんだ。」

そう言うと、藤川はまたタバコに火を付けた。

「はあ？今更？カヨちゃんは？お前、何考えてるんだ？」俺は思わず言葉を荒くした。

「自分でもどうしていいか、本当に解らない。ただ、今、幸子を一人には出来ない。」

「おい、本気か？」

俺は驚いて藤川の顔を見た。

藤川の表情は今まで見たこともないほど苦悩していた。俺は言葉がなかった。

しばらくは黙って窓の外を見ていた。いつの間にか小雨が降っていた。

「今夜はどうするんだ？」俺は最後にそう聞いた。

「実家に帰って、久しぶりにお袋の顔でも見てくる。心配かけて悪いな。そろそろ行こうか。」藤川はそう言うと、タバコを消して、席を立った。

初めて俺は気づいた。

カヨちゃんが「藤川と別れる。」と祥子に言った理由は、単に前妻のところに無断で泊まってきたというような事ではなかったのだ。

おそらく彼女は、藤川の様子から、藤川の気持ちを読みとったのだ。

彼女が藤川を深く愛していればこそ解ったのだろう。
そう思うと、カヨちゃんの心が痛々しかった。

七月十五日・木曜

祥子はシーツを胸の上まであげて、腰の後ろにクッションをあて、ベッドに座った。

それからキャビンマイルドをくわえて、俺のジッポーで火をつけた。それを仰向けに寝たままの俺の口元に持ってきた。俺が受け取ると、

今度は自分のマイルドセブンをくわえて、もう一度ジッポーを使った。

「カヨちゃんの様子は？」

ゆっくりと煙を吐き出してから、会ってすぐに聞こうと思っていたことを、

俺はやつと尋ねた。

藤川がカヨのもとを出て、二十日以上経っていた。

「うん、大丈夫。・・・でもないか。」そう言つて、祥子が一つ、ため息をついた。

「ん？どうした？」俺は祥子のため息が気になって聞いた。

「アキヒコはどうしてカヨを捨てたのかな？愛してなかったのかな？」

祥子は何も映っていない大型モニターを見つめながら言った。

「そんなことはないだろう。さっちゃんの事が心配だったのと、やっぱり子供のことが気がかりだったんじゃないのかな。」

俺は左手を祥子の腹の上あたりに置きながら答えた。

「さっちゃん？仲良しね。准哉はさっちゃんの味方だもんね。」

祥子が俺の方も見ずに言った。

「おい、どうしたんだ。訳のわからないこと言うなよ。」

俺は祥子の顔をのぞき込んだ。

「男の人の気持ちって、簡単に変わるんだ。」

祥子はわざと俺に目を合わさないようにして言った。

「なあ、祥子がショックなのも解るけど、藤川達のこと、俺にあたるのはよせよ。」

俺はそう言って右手を祥子の頬に当て、俺の方を向かせようとしたが、

祥子はことさらに向こうを向いてしまった。

俺が吸い終わったタバコを消そうとした灰皿の中で、祥子が半分も吸わずにもみ消した

マイルドセブンが、無惨に折れていた。

「准哉もいつか急に心変わりするんでしょ？ほんとともう飽きてたりして。」

祥子はいつの間にか涙声になっていた。

「なあ、くだらないことで泣くなよ。」

「くだらなくはないよ。ほんとだもん。」祥子はそう言つと初めて俺を見た。

「祥子、変だぞ。やめよう、こんな話。」

俺は話があらぬ方向に行きそうに思えて戸惑った。

ベッドを出て、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出した。キヤップを開け、一口飲んだところへ祥子が言った。

「さよならしようか？」

「えっ？何？」俺は思わず聞き返した。が、祥子の言葉は、はっきり聞こえていた。

「終・わ・り・にしようって言ったのよ。わかる？」

祥子は初めの三文字を一言づつ区切るように言って、俺を見た。

俺はベッドには戻らず、ソファーに深く腰掛け、新しいタバコの封を切った。

ボックスの中からカバーの封紙を取り出した。

小さな銀紙を捨て、箱の底を指で軽く弾く。

飛び出した一本を抜き出し、右手に挟んだ。

「ああ、いいよ。そうしよう。祥子がそうしたいなら。」

「こんなこと、いつまでも続けていて、いい訳でもないからな。」

俺は、右手の中のタバコを見ながら言った。

「いいの？ほんとに？」

祥子が、今日初めて、俺を真っ直ぐに見た。

俺はキャビンマイルドに火を付け、一口大きく吸い込み、それから、

出来るだけゆっくりと吐いて、言った。

「いいよ。俺も、もともと思ってたことだから・・・。

祥子はさ、ほんととはこんな事してちゃいけない女なんだ。

祥子は、自分で気づいてないかも知れないけど、ほんとに恵まれてるんだよ。

俺が言うのもなんだけど、祥子の家庭はいい家庭だよ。

俺なんかに寄り道して、大事なもの無くしたら・・・。

祥子が哀しい目にあつたら、俺はどうしていいか解らない。」

俺はそう一気に言った。

「・・・うん。それは解ってる。自分が恵まれてる方だって事は。でもね・・・」

祥子はそこまで言って、口を閉じた。

「よし。終わりだ。今日でおしまい。」

俺はベッドの上に座っている祥子に、そう言った。

祥子は黙ってシーツの中に潜り込み、俺に背を向けた。シーツが小刻みに震えた。

ソファーに座ったまま、続けざまに二本のタバコを吸い終えた頃、祥子の声がした。

「ねえ、ほんとに？」

「ああ。ほんとだ。今夜からメールもしないよ。その方がいい。」

俺はそう言って、ソファーから立ち上がり、ハンガーにかかっていたジーンズを履いた。

そして、背中越しに祥子に言った。

「さあ、帰ろう。」

祥子は黙ったまま、シーツを巻き付けてベッドを降りた。

俺は部屋を出て洗面所へ向かった。

顔を洗って戻ると、祥子は着替えを済ませていた。

俺と入れ違うように洗面所に向かった。

シャツを着て、タバコを一本吸い終わった頃、祥子が化粧を済ませて戻った。

「私にもちょうだい。」

そう言って祥子は俺のタバコを一本抜き出して、くわえた。

俺はジッポーを差し出して、火を付けた。

祥子は、ジッポーの火にタバコを寄せた。

深く静かに吸い込んでから、ふーっと一気に吐き出した。

細長い煙が、部屋の中で揺らめいた。

「ありがとう。」祥子はそう言って、微笑んだ。

俺は祥子の右手からキャビンマイルドを取り上げて、灰皿に寝かせた。

「ありがとう。」

俺も全ての思いを込めてそう言った。

そして、祥子の顔を両手で挟みながら、ほんの短いキスをした。

「楽しかったね。・・・」祥子はそう言くと、声を詰まらせた。

「おいおい、泣くなよ。せっかく化粧直したのに。」

俺がそう言くと、祥子は、黙って頷いた。

七月十六日・金曜

藤川から電話があつたのは、朝十一時過ぎだった。

「今どこにいる？」久しぶりに聞く藤川の声は、元気を取り戻していた。

「おう。今は市内。なんだ？どうした？」

俺は車を路肩に止めてイヤホンマイクをセットした。

「俺も今から市内に向かうんだが、昼飯でもどうだ？」藤川が言った。

俺は傍らの手帳を開いて、スケジュール表の午後の部分を確認した。

二件、予定があつたが、連絡すれば、夕方か明日に変更出来そうだった。

「ああ、いいぞ。午後は大した予定もないから、ゆっくり出来る。」バックミラーに後続が無いことを確認して、車を走らせた。

「どこがいい？讃岐屋でいいか？」

藤川は前に何度か行ったことのある、和食レストランの名を告げた。

「ああ、わかった。何時にする？」

俺は右折レーンで対向車を見ながら言った。

「ちょうど十二時に着くと思う。いいかな？」

藤川はそう言ったあと、電話の向こうで社内の誰かと、一言二言交わした。

「ああ、いいぞ。じゃあ後で。」俺はそう言って、携帯を切った。

二人とも昼定食を食べた後、ドリンクバーからアイスコーヒーを

取ってきた。

「どうよ？」キャビンマイルドに火を付けてから、藤川に尋ねた。

「ああ、あの時は心配かけて悪かったな。」藤川もタバコに火を付けた。

「いや、そんなのはいいんだ。カヨちゃんとは、もうホントに終わりののか？」

まずは藤川の話からだ、と俺は思った。

「うん。・・仕方ないと思った。・・あの時は。」

藤川はそう言うところをコーヒを飲み干した。

「あの時は？」

「幸子がかかりおかしかったからな。今はもう落ち着いているし、あの時のこと、

随分反省してるみたいだ。それで、どうしても無理なら、彼女のところへ行ってもいいって

言い出した。」

藤川はそう言うところを、グラスを持って立ち上がり、ドリンクバーに向かった。

「お前はどうしたいんだ？」藤川が戻るのを待って、俺は言った。

「・・勝手なようだが・・やっぱりカヨと暮らしたいと思って。」

藤川はそう言うところを灰皿でくすぶっていたタバコの火を、押しつぶして消した。

「そうか・・さっちゃんには、もう話したのか？カヨちゃんには？」

おれは、カヨは少し痩せた　と祥子が言っていた事を、思い出しながら聞いた。

「ああ、どっちにも話した。幸子もわかってくれた。無理して暮らしても仕方ないから。」

実は昨日、カヨのところへ戻った。」

藤川はそう言うのとタバコに火を付け、ふーっと大きく吐き出した。「なんだ、そうか。早く言えよ。そうか、収まったか。それならいい。ホッとした。」

俺はそう言っただけで藤川に笑いかけた。

「うん。カヨにはつらい思いをさせたし、祥子やお前にも心配かけて。」

いろいろすまなかったな。・・・

ところで、そっちは？変わらず仲良くやってるのか？」

藤川にそう聞かれたら、話さない訳にはいかないな、と思った。

「・・・実は、昨日別れ話した。」俺はそう短く言った。

「えっ？何？おいおい、なんでだ？何かあったのか？」藤川は本気で驚いていた。

「いや、特に何かあった訳じゃない。ただ、そろそろ潮時かと思っていた時に、

そんな話になって・・・俺も、正直驚いてる。でも、もう終わった方がいいのは確かだからな。」

俺はそう言って、一杯目のコーヒーを飲み干した。

「ケンカした訳でもなく？嫌いになった訳でもなくか？」

藤川はそう言ってから、また付け足した。

「祥子ちゃんは何？それでいいって？」

「別れようと言い出したのは向こうだから。俺は振られたほうだ。」俺はそう言って笑った。

「そうなのか。うーん。そうか・・・昨日か・・・」

藤川はそう言つと、じつと黙って俺を見てから、言った。

「お前、それでいいのか？ほんとに？」

「なあ、藤川。じゃあ聞くが、俺達・・・俺と、祥子、このまま続けてどうなる？」

祥子は幸せだと思うか？俺なんかにつまずいて？俺なんかと付き合いつつて、

幸せになれるか？」

俺は思わず声を大きくしてしまった。

「俺だってほんととは別れたくはない。本気だったかも知れない。本気になっちゃいけないのにな。」

俺はそう言っただけでほとんど無意識にこぶしを握りしめた。

「確かに辛いところだな。難しいな・・そうか、それで別れたか。辛いな。」

藤川の言葉を俺はぼんやり聞いていた。タバコをくわえたまま、ぼうつとしている俺に、

藤川が火をくれた。

「適当に遊べる男じゃないからな、お前は。」

藤川が真顔でそう言った。

「それはお互い様だろうが。」俺はやっと少し笑えた。

俺は二杯目のコーヒーを、藤川は三杯目を入れに席を立った。席に戻るとすぐ俺の携帯が震えた。

メール。

祥子からだった。

俺はちらつと藤川を見てから、メールを開いた。黙って最後まで読んだ。

二度読んだ。二度目は、涙でぼやけて読みづらかった。

「メールしてごめん。でも聞いて。准哉、昨日の話、いまさらイヤ

って言ってもいい？

今のままでいいとは私も思っていないのよ。でもやっぱり今はまだイヤ。

このまま会えないのは寂しすぎるよ。

准哉と出会ってから毎日が楽しくて、だからいろんな事も乗り越えられたし、

毎日の嫌なことにも我慢できるの。会えなくなるって考えたら、もうダメ。

耐えられない。・・・もう少し、いままで通りって考えたら？」

読み終えた俺は、藤川に「祥子。」とだけ言った。藤川が

「お前もやり直すか？」と言った。

俺は黙って頷いた。それから藤川に向かって尋ねた。

「なあ、この先に何かあるのかなあ」

「さあな。・・・でも、きっと何かいいこともあるさ。」

藤川はそう言って笑った。

「今からそっちに行っていていいか？」

俺は祥子にそう返信した。

祥子からのメールは、すぐに返って来た。

「うん。」

メールを見た瞬間、泣き虫の祥子の顔が浮かんた。

「行くよ。」俺は藤川にそう一言言って、席を立った。

「また四人で飲みに行けるな。」
そう言った藤川の声を、俺は背中で聞いた。

完

7・（後書き）

最後までお読み下さり、ありがとうございました。

「陽炎の向こう側」は、拙作「同窓会で逢おうね」の続編として書きました。准哉と祥子、特に祥子のキャラクターには、少なからず思い入れが出来てしまいました。（笑）今回も、結局、別れさせることが出来ずに・・・（笑）この作品を書いている途中で、突然3部作にする事にしました。次回作が最後です。さてさて、どうなりますか・・・よろしければ、次回作も是非お読み下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3246b/>

陽炎の向こう側 （続・同窓会で逢おうね）

2010年12月7日02時18分発行